

5 廿五年一月 御本席様身上障り願

さあへへへたつねるさしず いかなる事 とふゆふ事  
 さあへはなしやへ とふゆふはなし たつねたは」(38オ)  
 なし 一日の日とをゆう事 なんでもつとめよふとをもふ つ  
 とめにやなるまい つとめさゝにやならん 日々の処の里ハ  
 とふゆう事とをもふ よふ事情をきいてくれ とふゆふ事情き  
 いてくれ とをゆうやらわからん 事情日々それへみなへ  
 それへ はたらき日々つくしている その中、なにもわから  
 ん なにもしらんもの もふ道具てゆふなら よ」(38ウ)  
 ほと はそんなつてある とふかしふくして成とつかをふとゆ  
 ふ ねんけんへとゆうて 日々御地場へとといふハ 世界  
 さとす 心から御地場と云ふて てゝくる はなしをきかし  
 たいてへの所ハ からみつなきいある これから何年たてハ  
 とんなよ 何年たてハとのよふになるといふ 何年たゝいても  
 どのよふな道があるやらわからん 日々十の事」(39オ)  
 務をとをらにやならん かゝりかたて かゝりかたたら と  
 れほとつハつているものでも 一寸はずす はづせばこたわろ  
 ふにもこたわれんまい はやくしらし事かある これよりへ  
 ふかき事情 たつねるまで つもりへた事情 はあへおさ  
 まつたなあと云ふ すんたなあとといふ 一日の日のしやんが  
 ちこふたなあとゆう さあへはやく事情」(39ウ)  
 お いそくから 一寸おさへてある なんめつかへてある あ  
 さおきかける とをもならん 席三名一日の日によきなく事情  
 又とをく事情 とふもいかん もふ一日であろうかと云ふ  
 これもとをも みていられん 一席三名たしてへ 世界たし  
 きる迄 世界中すつきりつないてしまふ つなきかたたら 一  
 重にも二重にもつなく つなけハてるにもやふれ」(40オ)  
 ん はいるにもはいれん 一重やふりても 又一重きれんよふ  
 につないてゆく 日々さつけへのつなきやない 世界中 心  
 の里をるくなくのや さあ二重にも三重にもつなく さあ  
 年限の道 三年やろふか 五年やろふか 一年やろか いまや  
 ろか これわかろうまい なれとあとへの年限をしやんしてみ  
 よ さあへあとへの事をよく」(40ウ)  
 おも系 さきの事ハゆうまでや あゝとゆうよふな物かてきる  
 ゆいきかしても こたゑん さとしてもこたゑん たれとも  
 ゆわん さあこれからハ 大てゆきぬげの道をひらく たいて  
 の道をひらかねは てはいりができん おふきいものへいれて  
 ちやんとしてあれば くとくはかりで とをもならん そこ  
 てたいての道をつける 席かやすめハ 又をれるとをへ(41オ)  
 もふやろ 何時をきて 席をつとめるやらしれん 一日もやすま  
 せん やすませんで これよをきいてをけ」(以下空白 41ウ)

この「おさしづ」は、廿五年一月としか書かれていないが、  
 正文と対照してみると、「明治25年1月12日 正午 本席身上  
 御障りに付伺」である。一部脱落した文節もあるが、ほぼ正文  
 に近い。なお、40ウの「心の里をるなくのや」の個所、「る」は「流」  
 のくずし字が記されている。本来なら「徒」のくずし字でなけ  
 ればならない。写し間違いか、あるいは元本が誤っていたのか。  
 すなわち「つ」と読んで「つなく」という意味であろう。

引き続いて次の「おさしづ」がある。

6 全夜 はその里わからん故の願

さあへたつねてるへ 尋ねてねばわかろうまい わからん  
 一日の日を以て 一寸はしめかけたる とふゆう事であるふ  
 第一咄しとゆうハ つゝまる処 をさまる所 たつた一ツをさ  
 まるといふハ ところからよせくるへ くらからハ きゝわ  
 けておかにやならん いつへも道具たとゑて といてある  
 はそんなりたるとゆうハ 一時さと」(42オ)  
 さにやならん しふくだんへするなら つかわるてあるふ  
 たかいへの里 そんなら ふるい道具ハはそんなして あたら  
 しい道具ハはそんなない なれと一ツてはそんな あたらしい道  
 具はそんならまい 里によつてはそんな よき事ハさとしよい  
 わるき事ハさとしにくい そこて里ハみな一度二度三ゝ度 だ  
 んへをくれる この目もよいわ らいめもよいわとゆう」(42  
 ウ)  
 はそんなけんきゆへ一ツいそく ちいさな事ハないて 大き  
 い事はそんな きりたらはそんなてきん はそんなてきんよふになり  
 たら くみかいにやいかならん とれたけしふくして なん  
 てもとゆう びつしやりこけてしもてからハならん いつもと  
 いてある きゝわけ もとふきかさにならん すへハいふま  
 てや この事ハゆわいても おさめるとも とりし」(43オ)  
 まるとも ゆへよまい 日々はやくといてきかし つまらん時  
 ても とをなりこをなり 日かたてバ はいろふか いこか  
 世上へたいしてハならん 地場へたいしてハ とうむならん  
 なんてもかてもてる てかけてハならん だんへにをいかけ  
 てある しふくすれハ いつへまで こけてからとふむなら  
 ん いつへまでつたへて 一ツハ会議とすねは なるまい  
 (43ウ)

この「おさしづ」の割書は、「明治二十五年一月十二日夜  
 本日昼のおさしづに古き道具破損という処、押して願」である。  
 おさしづ書にも、間をあげず続いて記載されている。正文と比  
 較するとき、かなり近いものがあるが、いくつかの個所で、文  
 節が抜けている。書き下げ以前のものか。検討の余地がある。

7 全 十三日午後五時前の指図二付て御願

さあへへへさしすと云ふ これまでとんなさしつもして  
 ある さしすハちかわんなれとへ当分ハ その心ている な  
 れと日かたてバ ついにわ かつてをして ついてへついに  
 くすれ その日へのかつてをもつてくすす そんな事くらい  
 ハ ほんのちいさい事や とんならん事ハ 其時の」(44オ)  
 はやいによりてする事ハ とふもなら そのはによつてとうら  
 ねばならん そんな事くらいハ小さい事 よふ事情きいてをけ  
 をもいかけなき席か一日も二日もやすみ 心ておもふ あすと  
 をもへと とをもならん なにかちかうと みなをもふやろふ  
 はんじさとして 一ゝかんがへたさねはならん 系いかけん  
 事しておこやないかといふ なんてもない」(44ウ) (以下次号)